



Dessauの町とバウハウス

田中 辰明

お茶の水女子大学名誉教授・工博

はじめに

2024年7月13日に Dessau のバウハウスを訪問した。ベルリン中央駅を出て Dessau に向かうドイツ鉄道の列車は、ベルリン市内の最後の駅ベルリンヴァンゼーに停車する。筆者は、宿泊しているホテルを出て電車でその駅へ向かい乗り換えてベルリンヴァンゼー駅から列車に乗車した。土曜日という事もあり、行楽地に向かう人々に既に列車は相当混んでいた。自転車を乗せている人、大型の愛犬を伴った人もいた。列車はプロイセンの発祥の地、ブランデンブルグの平原を西に向けてひた走る。途中駅で徐々に乗客は下車し、終着駅 Dessau 中央駅に着くときには乗客も疎らであった。ホームに降り立つと「バウハウスの町 Dessau 中央駅へようこそ」という看板が目に入った(写真1)。駅の構内にはバウハウス博物館への案内看板もあった(写真2)。博物館の見学は時間を要するであろうから、まずバウハウス校舎を訪問することにした。

1. バウハウス校舎

筆者はバウハウス校舎を何回か訪問しているが、コロナ禍の影響でこの5年間は訪問していない。Dessau 中央駅を西側に出て、シュパーベ通りを抜け、バウハウス通りを直進すればバウハウス校舎にたどり着く。中央駅から1 km ほどの距離である。土曜日であるので、混雑しているのではないかと懸念して入場したが、内部は空いており拍子抜けした。これは新たにできたバウハウス博物館へ訪問者が流れたためであろう。ヴァルター・グロピウスが1925年に設計したバウハウス校舎は何時ものように筆者を温かく出迎えてくれた(写真3)。鉄とガラスのカーテンウォール構造を前面に出し、現代建築の模範となった建物である。建物の中に入ると1階の講堂には以前と同じく天井にはモホリー・ナギー作のパイプの照明器具があった。またマルセル・ブロイヤー作のスチー



写真1 「バウハウスの町、Dessau 中央駅」の看板のある Dessau 中央駅に降り立った筆者



写真2 Dessau 駅構内にあるバウハウス博物館の案内

ルパイプ製の椅子が整然と並べられていた(写真4)。オスカー・シュレンマーが女性の社会進出としてバウハウスで学ぶ女子学生たちが階段を上がっていくモンタージュ写真を作った階段がある。かつてはこの階段で、写真を撮影する訪問者が多く、人の入らない階段の撮影を



写真3 バウハウス校舎



写真4 バウハウス校舎講堂の天井



写真5 バウハウス校舎の階段



写真6 グロピウスが唱えた「芸術と技術の統合」

行う事は至難の業であった。しかし今回は人影もなく、思う存分撮影を行う事が出来た(写真5)。階段の踊り場の壁にはとんでもない場所に暖房用の放熱器が設置されている(写真6)。グロピウスは「芸術と技術の統合」という事を主張した。本来絵画が飾られていて不思議でない場所に放熱器を設置したのである。放熱器はコールドドラフトを防止するために、外壁の窓の下に設置するのが鉄則である。グロピウスは将来断熱技術者やガラス窓製造業者の努力で、建物の断熱性能、気密性能は飛躍的に向上するであろうと考えた。そうであれば、放熱器は窓下でなく何処に設置しても同じでないかと考えたのである。グロピウスは好んで陸屋根を用いた。当時の断熱、防水技術では雨漏りが生じた。しかしこれも将来断熱技術者、防水技術者の努力で雨漏りは防止されるであろうと考えた。事実技術は改善され、現在陸屋根は多くの建築で採用されるようになった。

2階から3階に上がる階段の踊り場には大きなガラス窓が取り付けられ、そこには自然換気用に開口部が取り



写真7 バウハウス校舎自然換気口(日本の障子にヒントを得たという説もある)

つけられている。チェーンで開口部の開閉を行えるようになっている(写真7)。

2. マイスターハウス

筆者はバウハウス校舎を出て、北へほぼ600m程歩い



写真8 バウハウスマイスターハウス



写真9 エルベ河畔のコルンハウス

た。ここにはバウハウスマイスターハウスと呼ばれるグロピウス設計のバウハウスの教員宿舎が建っている。大きな松林の中に白い矩形の住宅が並ぶ。一番奥に巨匠パウル・クレーとカンディンスキーが共に生活をした住宅がある(写真8)。二人はこの住宅で何を語り合っていたのであろうか？

3. コルンハウス

このマイスターハウスからコルン通りを北上するとエルベ河に到達する。その河畔にモダン建築のコルンハウスが建っている(写真9)。コルンハウスの設計者はグロピウスのアイディアに従い設計図を描いていたカール・フィガーという建築家であった。非常に長い間グロピウスと共に働いた建築家である。氏がコンペに応じてコルンハウスを設計した。レストランとして市民に親しまれている。第二次大戦でも爆撃を受けずに無傷で残った。本来ここで、コーヒーを飲みながらエルベ河の流れを眺め、休憩をと考えたが、レストランは非常に人気があるらしく、混んでいた。あきらめてデッサウ中央駅に戻った。途中小さな公園があった。そこには彫刻が建っていた。これはバウハウスで学び、バウハウスの思想を継続させるべく発足したウルム造形大学の初代校長マックス・ビル作品であった。「終わりなき階段(Unendliche Treppe)」という題が付けられていた(写真10)。無造作に公園の中に建てられ、散歩の犬に小便でも掛けられたらどうなるかなど、不要な心配もした。どうもドイツの犬はしつけが良く、そのような事はしないようである。

デッサウ中央駅に戻り、今度は南東の方向に向かった。約1kmのところにバウハウス博物館があった(写真11)。



写真10 デッサウ市内の公園に建つマックス・ビルの作品

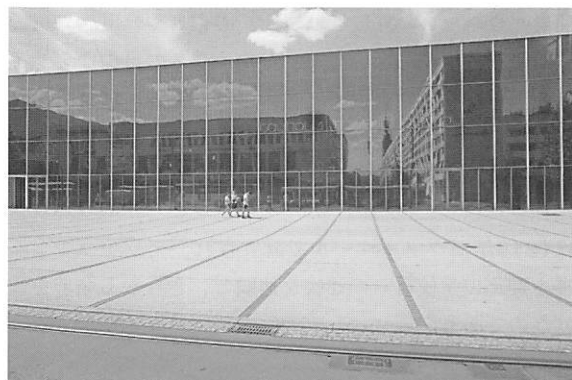


写真11 デッサウのバウハウス博物館

住所はミース・ファン・デル・ローエ広場となっていたが、どうも最近名付けられたようである。博物館を探す途中で何人かに聞いたが、「知らない」と答えられた。直接「バウハウスの博物館は何処ですか？」と聞くべきであった。博物館はガラス張りのモダン建築である。

4. デッサウのバウハウス博物館

4-1 博物館について

ドイツの博物館や美術館を訪れると、その展示方法の巧妙さにいつも感心する。特にデッサウのバウハウス博物館では、展示物が非常によく整理されており、訪れる人々にとって理解しやすい体験が提供されている。入場して進むにつれ、起承転結が明瞭に示されており、各作品の背景や意図が自然に浮かび上がった。

さらに、館内では音声ガイドが設置されており、必要な情報を補足しながら楽しむことができる。照明の工夫も素晴らしく、展示物の魅力を引き立てる演出が施されている。また、展示物の写真撮影が自由である点も印象的で、訪問者が自らの体験をシェアし、文化の普及に寄与することを促しているようである。このように、ドイツの博物館はただの展示空間にとどまらず、観客との対話を生み出す場としての役割を果たしている。展覧会はブラックボックス形式で展示されており、展覧会はドロテー・ブリル(Dorothee Brill)、レギーナ・ビットナー(Regina Bittner)、ヴォルフガング・テーナー(Wolfgang Thöner)が担当し、シナリオはベルリンの設計事務所 chezweitz¹⁾が手がけた。全体は3つの展示室で構成されている。来場者は、研究室のような展示インスタレーションで迎えられる。

デッサウ博物館は、初めてバウハウス財団デッサウの豊富なコレクションを一般に公開している。展覧場「試験場バウハウス」では、オリジナルの家具や日用品、写真、設計図、芸術作品を通じて、バウハウスの自由なデザインや工業的なプロトタイプ、芸術的な実験、経済的なプレッシャー(財政難)の中での学びと教えの日々が紹介されている。また、デッサウの造形学校で培われた共同体精神や卓越した技術についても触れている。バウハウスは1919年にヴァイマールで設立され、デッサウで全盛期を迎え、学校自らの建物を建設し、さらなる発展を遂げたのである。

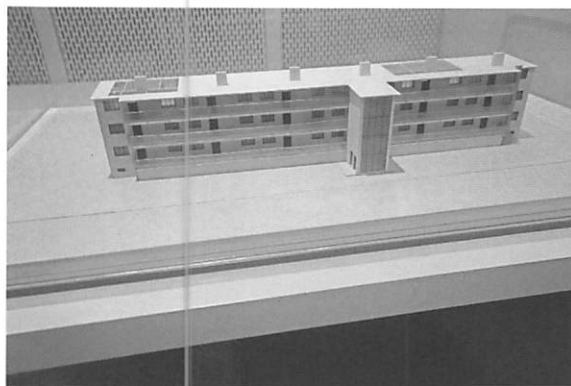


写真12 ハンネス・マイヤー設計の片廊下式集合住宅

4-2 「試験場バウハウス」の展示

「工業化に向けて、ここでは実験的な住宅や公共建築が建設された。ここではハンネス・マイヤー(Hannes Meyer)設計のデッサウ、テルテン(Törten)に建つ片廊下式集合住宅の写真が展示されていた。ドイツではプライバシーに難点があるとしてあまり普及しなかったが、日本では多くの集合住宅でこの方式が採用された(写真12)。デッサウのバウハウスでは、エルンスト・カライ(Ernst Kallai)の言う『実生活の産業文化』に取り組んでいた。これにより、書体や家具、照明、織物、壁紙、建築など、バウハウスに由来する多くのものが今日の私たちの生活に自然と溶け込んでいる。そのデザイン理念は、他の文化現象と比べても21世紀の日常に深く浸透しており、その親しみやすさのために、バウハウスが直面した歴史的な危機や制約はほとんど忘れ去られている。書体に関する展示としてヘルベルト・バイヤーによるレタリングが展示されている(写真13)。同じ字幅によるレタリングは後にバウハウス書体として世間に広まった。デッサウのバウハウス校舎では縦書きで「BAUHAUS」と建物に描かれている(写真3)。当時これは画期的な出来事であった。家具としてはスチールパイプを使用した(写真14)椅子が展示されている。これはミース・ファン・デル・ローエにより設計されたものである。照明としてはマリアンネ・ブランツによる照明器具が展示されている(写真15)。これは後にバウハウスの照明器具として、世間に知られ、現在も販売されている。織物としては初めて女性としてバウハウスの教員(マイスター)となったグンタ・シュテルツルの作品が展示されている(写真16)。

展示会『試験場バウハウス』では、10のテーマを通し



写真 13 バウハウスでは書体が大切にされ、統一も行われた。(ヘルベルト・バイヤー)



写真 14 スチールパイプ椅子(ミース・ファン・デル・ローエ)



写真 15 マリアンネ・ブランドによる照明器具

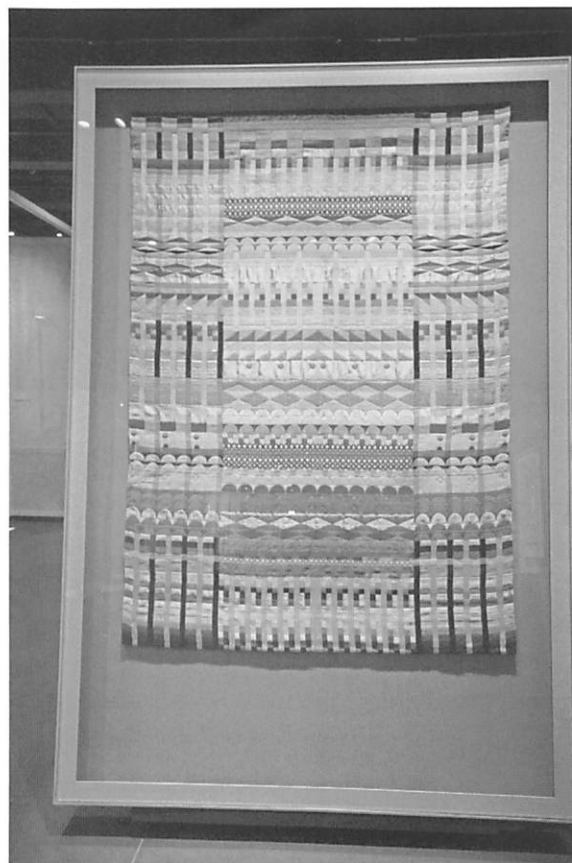


写真 16 グンタ・シュテルツルによる織物

て、バウハウスでの教育、デザイン、建築が、社会の変革と発展にどう貢献したかが示されている。この展示の目的は、デザインのアイコンを紹介することではなく、教育的・概念的なアプローチや、製造方法、形の形成過程がどのように具体的なオブジェクトに具現化されたか

を伝えている。

4-3 教育の場としてのバウハウス

「バウハウス試験場」を思い起こさせるこの展示は、1926年にデッサウで開校したバウハウスに焦点を当て



写真17 ヴァイマルの国立バウハウスの校章(オスカー・シュレンマー作)

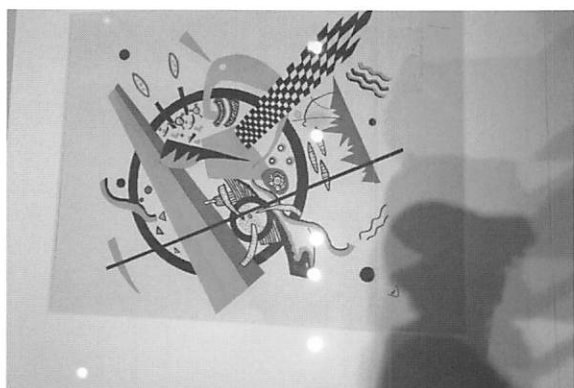


写真19 カンディンスキーが講義に使用した抽象画

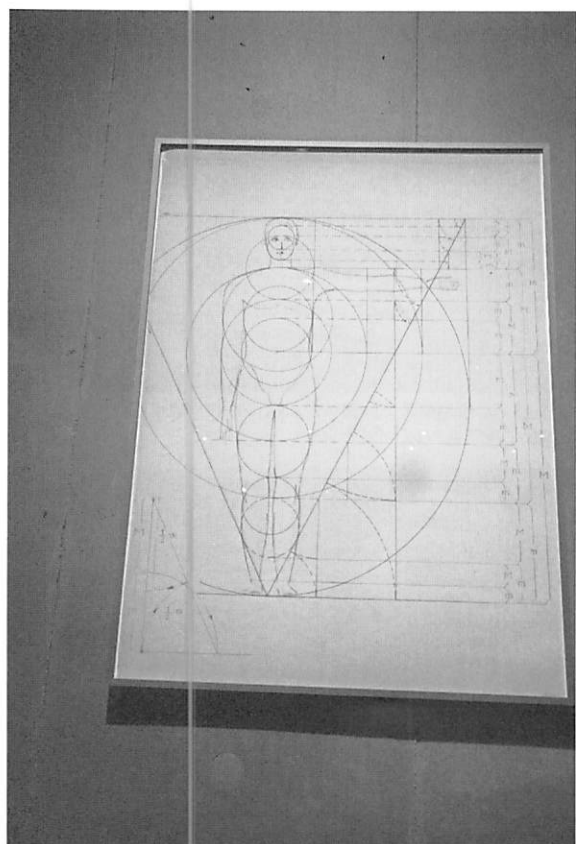


写真18 オスカー・シュレンマーが使用した講義の資料

ている。広々とした中央ホールが展示の中心となり、『学校としての実験場』と『工場の視点』というテーマに沿って、バウハウスが教育の場であった事を強調している。展示の最後の部屋では、バウハウスの遺産に焦点が当てられ、コレクションの形成が1976年のデッサウ・バウハウス建物の再開時と重なっていることが説明されている。ここではオスカー・シュレンマーが講義用に用いた人体図が展示されている(写真18)。またカンディンスキーが講義用に用いた抽象画も展示されている(写真19)。バウハウスには才能のあるフランツ・エーリッヒという建築家がいた。彼はユダヤの血が入っていたことにより、ナチスに捕らえられ、ブッヘンヴァルト(現在ではヴァイマル市に併合されている)の強制収容所に収監されてしまう。収容所で自分はバウハウスで学んだものであることを告白する。才能が認められ、ナチスの建築に協力をする。アウシュビッツをはじめ各地の強制収容所の門扉は氏のデザインによるものである。またナチス高官が強制収容所を訪問した際の迎賓館の設計も

行っている。こうする事で、どうにか処刑を逃れ、解放後旧東独で良い作品を沢山残した。しかし東独の建築材料は不良なものが多く、東西ドイツが合併後多くは取り壊されてしまった。フランツ・エーリッヒの紹介パネルとバウハウス時代の作品を写真20と写真21に示す。

コレクションの最初の部分では、バウハウスの受容に関する2つのテーマ、すなわち『歴史的展示』と『国際的ネットワーク』が取り上げられている。この『試験場バウハウス』という展示は、中央ホールでの3つの入れ替え可能な幕間によって進化し続ける『動的な展示』として設計された。また、バウハウス・エージェント・プログラムの一環として、訪問者がバウハウスの学びやデザイン実験を体験できる実践型ステーションが設置されている。

1926年12月4日、デッサウのバウハウス建物の開館式は、盛大に行われた。式では、「世界最速の男、スルミ」²⁾、「結晶の成長」、そして新建築の建設現場に関するドキュメンタリーの3本の教育映画が上映され、国内外からの招待客を驚かせた。これらの映画は、すでに建物そのも

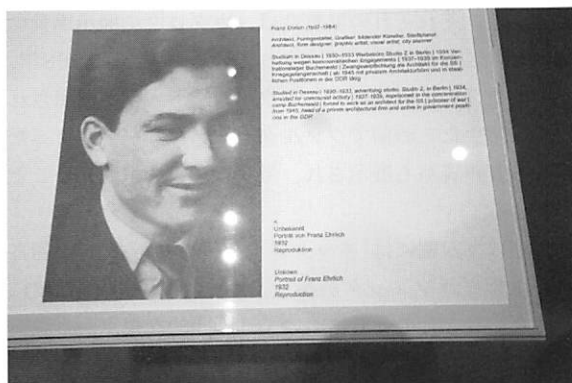


写真20 フランツ・エーリッヒの紹介パネル



写真21 フランツ・エーリッヒの作品

のが引き起こしていた驚きを一層深めただけでなく、当時の重要なテーマである速度や加速、構造と混沌に向き合っていた。ガラスと鉄でできたこの学校建物の軽やかで透明感のあるデザインは、1920年代の混沌と不安に対して、明瞭さと集中を象徴していた。このデッサウでの開館式は、バウハウスが思索の場であり、実験的な研究と試行の場であるという理念をさらに強調するものとなった。

4-4 試行の場の展示

「Probierplatz(試行の場)」の展示では、訪問者をサウンドインスタレーションが迎える。このインスタレーションは、バウハウスが1925/1926年にデッサウへ移転した際に行われた公開討論を再現し、1926年のバウハウス開館時の歴史的な状況を浮き彫りにしている。また、バウハウスがデッサウでも共産主義者の巣窟でないと政治的な問題となっていたことも示している。

当時、デッサウ市は経済的に厳しい状況にありながらも、バウハウスの新校舎やマイスター住宅の建設を支援した。しかし、地元の職人たちはバウハウスとの競争を恐れ、また、バウハウスは性別役割や道徳観に反する教育機関であるとして批判した。やがてデッサウの政治情勢が変化し、バウハウスは右派ポピュリズムの標的となった。最終的には1932年、ナチス党が「共産主義的バウハウスの閉鎖」を掲げて支持を集めた。

このような敵意の声は、展示されている白い立方体の中の物体とは対照的である。ここでは、バウハウスが「試行の場」として紹介されており、数々の発明や実験、問題提起を通じて、その革新性と現代性が示されている。ここでは以下に記す8つの問題提起がなされている。

1. 芸術的創造の起源はどこにあるのか？
2. アルファベットはどのようにして普遍的になるのか？
3. 人間は形作ることができるのか？
4. ガラスで建築は可能か？
5. 光はデザインできるか？
6. デザインはどのようにして形になるのか？
7. 空気の柱の上に人は座れるか？
8. 広告はどういうようにして芸術になるのか？

このように、バウハウスの実験的な精神が、過去から未来へとつながっていることが示されている。

4-5 プラットフォーム展示場

「芸術と技術-新しい統一」というモットーのもと、ヴァイマル国立バウハウスは1923年に創立以来の成果を初めて公に姿を表し、世に問うた。創設からわずか4年後のことであった。市内各所で開催されたこの展覧会には、すでに1920年代の展示文化のすべての特徴が備わっていた。バウハウスがその後開催した展覧会と同様に、これは製作物の発表会であり、新しい美学の実験場であり、プロファイリングの手段でもあった。これによって、ヴァイマル共和国における現代的な住居と生活様式が普及することを目指していた。バウハウスはその展示デザインにおいて、当時の商業・産業展覧会の大衆向け商品の美学と芸術的に対峙した。その目的は、現代の消費社会および情報社会にふさわしい展示方法を追求することであった。これらの展覧会は、バウハウスが国内外で認知され、その歴史が記録され、さらにその標準化に大きく貢献した。

バウハウス雑誌の1928年4月号では、近代建築国際会議(CIAM)について報告されている。この会議は、建



写真22 上野伊三郎が主催した「国際建築」の展示

建築家たちがスイスのローザンヌ近くのラ・サラで設立したもので、1926年にハンネス・マイヤーが参加した国際連盟パレスの建築競技でアヴァンギャルド派が敗れたことへの対抗として生まれたのである。

CIAMやWerkbund(ヴェルクブント)といった組織、さらには雑誌や会議は、アイデアの交換にとって重要であり、それを実現する手段でもあった。バウハウス自体も、国際的な芸術家たちのネットワークであり、その出版物や会員資格を通じて、内部や地域、国内、そして国際的な結びつきを築き、維持していた。

同じ志を持つ人々は、さまざまなメディアを駆使してコミュニティを形成した。この広範なネットワークは、後のバウハウスの国際的な移住と影響の歴史の基盤となったのである。我が国においても建築家上野伊三郎³⁾がこれに呼応しインターナショナル建築会を立ち上げた。そして会報「国際建築」を発行した。この雑誌も展示されている(写真22)。

1920年代の展示文化の特徴をすべて備えていたバウハウスの展示会は、製作物の発表の場であり、新しい美学の実験の場でもあった。また、バウハウスの理念を広める手段としても機能した。目指していたのは、ヴァイマル共和国における現代的な住居や生活様式を普及させることであった。

コレクションを額縁として使い、左側の壁に初期のコレクションを展示している。その隣には「展示プラットフォーム」があり、1923年から1968年にかけて行われたバウハウス展の歴史を年代順に紹介している。これらの展示会は、バウハウスの歴史やその評価に大きな影響を与えた。選ばれた10の展示会は、バウハウスのメンバーによって企画され、バウハウス全体を代表する内

容である。それぞれの展示会は、カタログや展示風景の再現を通じて視覚的に紹介されている。また、1968年、バウハウスの後継機関であるウルム造形大学が閉鎖される際、学生たちの前でヴァルター・グロピウスが行った演説の音声資料も展示され、当時の背景を垣間見ることができる。

部屋の反対側には「ネットワーク・バウハウス」と題された大型グラフィックがあり、バウハウスが20世紀に与えた影響とその受容について、国際的な視点から説明されている。選ばれた国際的な機関や出版物は、バウハウスに関わる人々が前衛芸術のメンバーとして参加したプラットフォームとして紹介されている。

展示プラットフォームの年表

- ・1923年：国立バウハウス・ヴァイマル(1919-1923)、ヴァイマル
- ・1929年：若いバウハウス画家たち、ハレ美術協会、ザーレのハレ
- ・1929年：バウハウスの国民住宅、グラッシー美術館、ライプツィヒ
- ・1929/30年：バウハウス巡回展、プレスラウ、パーゼル、デッサウ、エッセン、マンハイム、チューリッヒ
- ・1930年：ドイツ部門、フランスインテリアデザイナー協会、パリ
- ・1931年：ドイツ建築展、ベルリン
- ・1938/39年：バウハウス1919-1928、ニューヨーク近代美術館
- ・1950年：バウハウスの画家たち、美術館ハウス・デア・クンスト、ミュンヘン

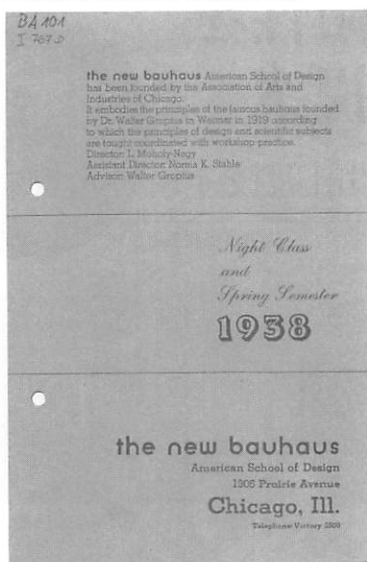
終わりに

全ての展示を拝見し、会場を出ようとする場所にカードが置いてあった。無料で持ち帰られるものであった。これは展示物をカードとして紹介しているもので、展示の復習に役立つものであった。筆者は25枚ほど頂いてきた。その内、2枚を紹介する。1枚はバウハウスが解散後モホリー・ナジーがシカゴで開いた「ニューバウハウス」に関する紹介であった(写真23)。もう一つはバウハウス創立50周年を祝った時のカードである(写真24)。

博物館の展示を見学し次の事が理解できた。

バウハウスは、1919年にドイツのヴァイマルで設立された芸術学校で、20世紀のデザインや建築に大きな影響を与えた。創設者はヴァルター・グロピウスで、

the new bauhaus Chicago (Falblatt zur Ausbildung 1938)
the new bauhaus Chicago (leaflet on study courses 1938)



László Moholy-Nagy, 1938
László Moholy-Nagy, 1938
Stiftung Bauhaus Dessau (I 767 D)

写真 23 バウハウス博物館の配布資料モホリー・ナジーがシカゴで開設したニュー・バウハウス

アートと工業デザインの統合を目指した。

バウハウスの主な特徴は以下の通りである。

1. 総合的アプローチ：美術、工芸、建築が一体となった教育を行い、理論と実践を融合させた。
2. 機能主義：形は機能に従うべきという考え方が根付いており、シンプルで機能的なデザインが重視された。
3. 素材と技術の探求：新しい素材や技術を積極的に取り入れ、現代的なデザインを追求した。
4. 社会的役割：デザインは社会に対する責任があるという考えがあり、生活を向上させるための実用的なデザインが重視された。極めて民主的なヴァイマル憲法の出現により、女性に活躍の場を与えた。
5. 指導・統率力 初代校長ヴァルター・グロピウスは若くして第一次世界大戦に参戦し、指導力を涵養した。バウハウスの校長として卓越した指導力、統率力を発揮した。

バウハウスの活動は、1933年にナチス政権によって閉校されるまで続き、その後のデザイン、建築、アートに多大な影響を与えた。バウハウスの理念は、今日のデザイン教育や実践にも引き継がれている。

バウハウスが発足した1919年とはドイツ帝国が第一次世界大戦で敗戦しヴァイマル共和国が発足した年で

Das Bauhausgebäude Dessau bei Ende der Rekonstruktion Anfang Dezember 1976. Blick auf Brücke und Werkstätten
The Bauhaus Building in Dessau at the end of its reconstruction, view of the bridge and workshops. Early December 1976

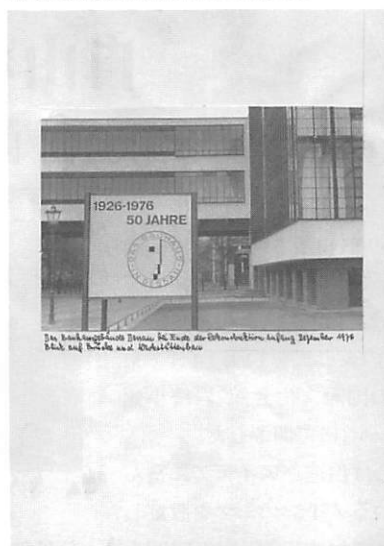


写真 24 バウハウス開設 50 周年祝賀行事

ある。国中に厭戦気分が溢れていた。バウハウスも国際化、インターナショナルという事が尊重され、教員(マイスター)も世界の有名芸術家が集められた。2024年9月末に行われたオーストリア下院選挙で極右の自由党が第1党になった。ドイツでも9月の東部3州の州議会選挙で極右政党「ドイツの為の選択肢(AfD)」が大いに票を伸ばした。オランダでも極右主導の連立政権が発足している。極右の躍進は難民・移民問題や経済低迷に対し、現政権が有効な対策を打ち出せないことにある。こういう事で国の内外に分断を生じさせることが有ってはいけない。今もう一度バウハウスのインターナショナルの運動を尊重すべきであるという感を新たにして博物館を後にし、ベルリンの宿に戻るべくデッサウ中央駅に向かった。

註

1. chezweitzは、ベルリンを拠点とする美術館および都市空間学のオフィスである。美術館のアートやテーマ別展示をデザインし、都市空間の認識と利用の変化に対する計画戦略を立案している。
2. Raavo Nurmi(1897-1973)はフィンランドの陸上王者。1924年のパリオリンピックで500mと5000mで金メダルを獲得した。その間は1時間しかなく、2時間の内に2つ金メダルを獲得したことになる。
3. 上野伊三郎は1922年早稲田大学建築学科卒業。シャロテンブルグ工科大学(現在のベルリン工科大学)へ留学。帰国後日本でインターナショナル建築会を創設。ブルーノ・タウトの日本への亡命を助け、日本滞在中徹底的にブルーノ・タウトの世話をした。

時間や空間の無限性を 自由な発想で提案

第51回 日新工業建築設計競技



挨拶する相臺社長▶

日新工業㈱(相臺志浩社長)は、同社が主催し“水コン”の愛称で親しまれている設計競技会「日新工業建築設計競技」の表彰式を11月14日、東京・港区の国際文化会館「岩崎小彌太記念ホール」にて開催した。

同競技会は創造とアイデアに富んだ水に関わるメインテーマを設定して開催されており、今年度で51回を迎える。今年の課題テーマは「ネバーエンディング・ハウス」。地震や自然災害、感染症の蔓延や紛争など、社会情勢によってライフスタイルは変化を強いられ、そこに暮らす人によっても住み方は変化していく。そうした中で、建築には終りがあるのかを問い、時間だけでなく空間的な広がり、コミュニケーションのあり方など自由な発想でデザイン提案をしてもらおうという狙いがある。

国内外から845件の登録と346点の応募作品が寄せられ、厳選な審査の結果11作品が入賞した。1等には小賀美瑛氏(早稲田大学)、加藤究氏(同)の作品が選ばれた。

主催者を代表して挨拶に立った相臺社長は受賞者と審査員に対して祝辞と謝辞を述べた後、「弊社は総合防水材料メーカーとして昨年、創業100年を迎えた。この建築設計競技は建築業界への感謝の気持ちを込めて1974年にスタートし、若い設計士の登竜門として『水コン』の愛称で親しまれ、今回で50年、51回目



▲一等の小賀氏(右)と加藤氏

を迎えることができた。今回は世界30カ国、346点の応募があり、白熱した議論がなされる中で11点の作品が受賞された。50周年記念懇親祝賀会が受賞者と審査員との深い交流の場になれば幸いである。本日受賞されました皆様のご活躍を祈念しています」と入賞者を称えた。

また、審査員を代表して西沢立衛審査委員長(横浜国立大学大学院Y-GSA教授、SANAA、西沢立衛建築設計事務所代表)の総評を述べた。西沢委員長は「今年の審査は1等を巡り意見が分かれ白熱した議論となった。多彩なアイデア、深い創造性を感じる作品ばかりで、審査員同士が本音で議論を戦わせられたのは、とても良かったと思う」と総評した。

また、今回は日新工業建築設計競技50周年記念懇親会も同会場にて行われ、歴代の審査員のほか受賞者の方々が約80名招かれ、盛大な式典となった。

なお、審査委員と入賞者については以下の通り(敬称略)。



▲総評を述べる西沢審査委員長

審査委員長：西沢立衛(横浜国立大学Y-GSA教授)、審査員：平田晃久(京都大学教授、平田晃久建築設計事務所)、吉村靖孝(早稲田大学教授、吉村靖孝建築設計事務所)、羽鳥達也(日建設設計監理部門設計グループ部長)、藤村龍至(東京藝術大学准教授、RFA主宰)、中川エリカ(慶應義塾大学大学院専任講師、中川エリカ建築設計事務所)、相臺志浩(日新工業㈱代表取締役社長)
第51回入賞者【1等】小賀美瑛(早稲田大学)、加藤究(同)【2等】石井開(東京藝術大学大学院)【3等】藤村圭央莉(SuKA建築設計事務所)、伊藤飛鳥(ものづくり大学大学院)【佳作】石井大翔(東北大学大学院)／遠山翔太(東北芸術工科大学)、土岐柊哉(同)／光永周平(熊本大学大学院)／POLINA SAVELEVA(Saint-Petersburg Academy of Fine Arts)、ANASTASIA YUDICHEVA(同)／高橋雅人(高橋雅人建築設計事務所)／波多野諒(フリーランス)／小泉柊喜(関西学院大学)、松本寿(同)、呉田遥隼(同)／陸儀(UDS㈱)